レヴィアタンはD.D.Dをデスクの上に置くとふうっと心底安心したようにため息をついた。
マモンが自分が女の子の悪魔と一緒にいる所を隠し撮りしていたのには内心驚いたが、非モテキャラを演じて騒ぎの鎮静化をし、どうしても兄弟たちにばれたくない事を隠し通すのに成功した。
レヴィアタンは椅子から立ち上がると水槽の近くに行き、のんびりと泳いでいるヘンリーを見た。
「ねえヘンリー、僕だって、本当は恋愛くらいするよね？」
ぽつりとつぶやいた後、レヴィアタンの口からは疲れと呆れが混じった大きなため息が吐き出された。
マモンが隠し撮りをしていた写真に映っていた女の子の悪魔は、間違いなくレヴィアタンが交際している女の子だった。
しかし長い間の引きこもり生活のせいですっかり兄弟たちの間では「年齢＝彼女いない歴」のキャラとして定着しているのを自覚していたので、もし彼女である事を認めていたら魔界中を巻き込んで大騒ぎをし始めそうだった。
レヴィアタンはその大騒ぎを想像し、背筋が凍るような気分になった。
パリピであるアスモデウスとマモンはクラブを貸し切って祝賀会をやるのは目に見えていたし、そんな事になったら自分と彼女はステージに上がって何かひと言言わなきゃいけなくなる。
（陰キャの僕にとっては地獄だ！？）
想像するだけで怖ろしい末路しか想像できず、なによりパーティーに行くだけでも相当の覚悟が必要な事なのに、ステージに上がって何か言わなきゃいけないなどと言うのは生き地獄以外の何物でもなかった。
さらに普段は静かなルシファーとサタンも確実に目立つように薦めてくるだろうし、なにより「祝い事だ」とか言ってどんなに拒否しても主役にする事は目に見えていた。
ベルゼブブとベルフェゴールのリアクションが地味そうだったのが唯一の救いだったが、それでもレヴィアタンにとっては想像するだけで胃が痛くなってきそうな展開になることが目に見えていた。
（だから隠しておきたくなるんだよ。あーあ。本当にあいつらってデリカシーがない。僕がどんなに無理だと言っても強制してくるだろうし・・・）
レヴィアタンはヘンリーを眺めながら脳内でひたすら愚痴を言った。
（でも、あの子昨日は本当に可愛かった・・・）
愚痴でも恋人と関連があったせいだろうか？レヴィアタンの頭の中は突然前向きな方向に変わった。
そしてレヴィアタンの脳内は昨日の夜、彼女の部屋でセックスをしていた記憶に変わっていった。